

---

# 伝道魔法少女は今宵も踊る

zens

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伝道魔法少女は今宵も踊る

### 【Nコード】

N6170F

### 【作者名】

zens

### 【あらすじ】

魔法を学ぶために、異世界からやってきた傍若無人な巨乳年増魔法少女？と、勉強の手伝いをさせられることになった貧乳万歳の少年のお話。互いが互いを目的のための踏み台とする。2人は目的を叶えることができるのだろうか？

初めて出会った彼女は、この世界のものとは思えないほどに美しいものだった。

その彼女は、僕に言った。

この世界の素敵な言葉を教えてください、と。

だから、僕は彼女に、こう言った。

図書館なり、学校なりで自分で探してください、と。

だって、彼女は綺麗だけど、僕好みじゃなかったから。

子供であればそろそろ寝ているであろう、午後11時。  
彼女と出会った翌日、僕は再び彼女と遭遇することになった。

今日は、一応彼女に会いに来たのだ。……一応。  
そんな僕の複雑な心境などいざ知らず。

彼女は、まるで親友にでも会ったかのような気さくさで僕の所へ駆け寄ってきた。

「さて、今夜も素敵な言葉を探しましょう」

「あの……、今夜『も』って、昨日は僕は何もしてません」

だが、彼女は僕の言うことなど聞いてくれるわけもない。

「いいじゃない、キミとボクが出会ったのだからこんな月の晩だったし。どうせ、いつも徘徊しているんでしょ？」

「そんなわけあるか！ 僕は、僕の理由があつてこの時間に外に出てるの」

そもそもこんな彼女と出会ったのは、月も出ていない曇った昨日の夜のことであり、僕は決して徘徊者なんかではない。

本当ならば、僕はこんなことをしているわけにはいかない。  
けれども、脅されているので仕方なしに来ているのだ。

「え、ケチね。ボクに協力するって言ったのは、キミだよ」

「ええ、そうですとも。僕が言いましたよ、あなたに火をつけられてね」

そう、出会ったあの晩。

僕は、この目の前の魔女に火をつけられたのだ。尻に。

「尻に火が付く。まさか、こんな訳の分からない魔法が最初の魔法だなんて思いもしなかった」

そう、あの時、僕は急いでいた。

それこそ、尻に火がついたような勢いで。

「僕は尻に火がつくくらいに忙しいの。だから、変質者に構っていない暇はないの」

自分でも何を言っているのか、訳が分からなかった。けれども、その言葉を口にしたのがいけなかった。

彼女は、感心したように僕の言った言葉を繰り返した。

「尻に火が付くか……。あなたのお尻に火が付いてるよ」

「はい？ 何言ってる……」

やっぱり頭がおかしい人だ。僕はそう結論付けると背中を向けて逃げ出す準備をした。

しかし、彼女が、その言葉を言ってすぐのことだった。

僕の尻の辺りが異様に熱く、そして何かが焦げるような臭いがしたのだ。

結果から言うと、僕のズボンはお尻の辺りに大きな穴が空き、半ケツ丸出しという変質者に僕は成り下がった。

当然、僕はその場から尻を隠して脱兎の如く逃げ出したかったが、彼女にお願い、ほとんど脅迫である、をされて仕方なしにその条件を呑んだのだった。

そして、今日の再開へと繋がっていくわけだ。

「今夜も言葉狩りだあつ」

「だから今日が初めてですけど……」

テンション高くついていけないよ。

「ということは、初夜ってことだね。どんな言葉が手に入るんだろ  
う?」

「はいはい」

もう帰ってください。後生ですから。

大体、こんな夜遅くの駅前で一体何をしようと言うのか。

サラリーマンや大学生がちらほらと駅から家を目指し、帰宅する中、  
僕らは駅前に佇み、その流れをじっとただ見ているだけだ。

たまに、変なのが彼女だけに絡んでくるけど、彼女は律儀にも1人  
1人きちんと相手をしていた。

何故か、絡んだ相手が半ケツを出して、逃げ惑う姿ばかり見かけた  
のだけど……。

「つーか、何やらかしてるんですか、あなた」

「え? うーん……ケツ燃やしてる?」

可愛さをアピールするかのように唇に指を当てても、僕にはそれは  
死刑宣告の前の一瞬の慈悲のようには映らない。

「ケツ燃やすって……もう少し言い方ってものがあると思うんです」

「何？尻？」

「……もういいです。あなたに一瞬でも清楚さを求めた僕がバカでした」

見た目は可愛いけど、所詮は見た目だけ。

中身はただの変態中年親父とそう大差ない、デリカシーのない女の子だった。

服を引つ張って胸元を覗きこむ姿は、思わずどきっとしてしまうけど、さつきから声をかけられるのはたぶん駅前でそんなことをする彼女の破廉恥さのせいだと思いたい。

間違ってもその格好のせいだと思いたくはなかった。

「これでも……？ キミ、貧乳が好みなの？ 1度死んで来た方がいいよ、ロリコン」

「どこで、知ったんですか、そんな言葉……。だいたい、貧乳イコール、ロリコンというのが間違ってます。大きな胸なんて何の役に立つんですか？ 大は小を兼ねるなんて馬鹿げてるんじか」

「……ロリコンなんて、向こうにもいっぱいいるし。そもそもこれくらい大きいのは稀少なんだから」

胸を強調するようにふんぞり返っている彼女は、たいそうご機嫌斜めのように、ふんと鼻を鳴らし、僕を睨みつけた。

随分と貧乳好きに優しい世界なことで羨ましいことだ。

それにしても、別世界にもロリコンっているのか……。

男ってどこでも一緒なんだ。ふと、遠くの世界の住人が近くに感じられた。

「はああつ、全然言葉なんて集まりもしない。どいつもこいつも疲れきった顔して、やあねえ」

「だいたい、ここに来ようって言ったのはあなたじゃないですか」

「駅前って言ったなら、もっと華やかで人もいっぱいいて、言葉も多く飛び交っていると思ったんだけどなあ」

普通、夜の方が人は少ないんだけどなあ。

「だったら、昼間に行けばいいのに」

「あー、ボク、昼間は寝てるし」

頭をポリポリと掻きながら、興味なさそうに彼女は言った。  
僕はもう呆れるしかなかった。

「何ですか、その昼夜逆転の生活は。ご飯は食べてます？ 風呂は？ 服は洗濯してます？」

「お風呂？ 何、ボクの体に興味あるの？」

「そこに食いつくんですか……。あるわけないでしょ、同じ服を2日も着てるような人のなんて」

汚いし、臭いもするだろうし。

でも、この人、全然臭いとかしないような……。

そう思っていると、彼女は僕の考えを読み取ったかのように自信たっぷりに胸を張って言った。



「ああ、それは大丈夫。魔道具で洗うことができるから。洗濯機？  
だっけ、あんなでかいだけの箱なんていららないよ」  
「だったら、この世界に来る必要なんてないと思います」

あと、その無駄な脂肪も強調しないでください。

非常に目ざわりです。夢を吸いつくす魔乳に用事などないのだ。

夢を与える貧乳こそ素晴らしいものだと思はそう思う。

「・・・」

目の前にいる人を否定していると、その人が、急に黙りこくってしまっていた。

「どうかしました？」

何か気分を害することを言ってしまっただろうか。

そう思って尋ねると、彼女はぽつりぽつりと自分の事を語り始めた。

聞いてもいないのに。

「この世界にボクが来た理由は、たった一つ。あの世界にない魔法を覚えて、優秀な魔法使いになること。この世界のステータスっていうのは何かは知らないけど、ボクのいる世界では魔法が全て。人が知らない魔法を知っていることは、それだけで羨望の的になる」

とりあえず話を聞いて思ったことがあった。

「で、本当の理由は？」  
「む、分かる？」

この人がそんな真面目な理由でこっちに来たとは到底思えなかったのだ。

そして、彼女もあっさりと建前であることを認め、真実を話し始めた。

「最近、あつちは巨乳の肩身が狭いんだよね。もともと巨乳は少数なのに、多数派の貧乳が乳は無いくせに態度だけは大きくなっちゃってさ」

でも、あなたは乳も態度も大きいですよね。

「しかも、優秀な魔法使いはみんな貧乳。おかげで、最近なんか巨乳排斥運動まで起こるんだよ？ 信じられる？」

「・・・ますます素敵な世界だ。僕も行ってみたいよ」

どうして、この世界には時空を越える発明や魔法がないんだっ！

これほど文明が進んでいないことを呪った日があっただろうか。

桃源郷の存在が分かっただのに、行けないだなんて・・・。

「・・・」

「ごめんなさい」

彼女の視線がそれだけで人を殺せそうなくらいに冷たいものだったので、思わず謝ってしまった。

僕が謝ると彼女はそれですっきりしたのかまた話を続ける。

「それが、地味に鬱陶しいんだよね。下着のサイズも大きい人用の物が販売されなくなったり、服もそう。何それ、巨乳は女じゃないとでも言いたいわけ？」

「うわっ、えげつないな。」

「せめて、存在くらいは認めてあげるべきだと僕は思う。」

「……でもさ、大きいのが好きな男だっているんでしょ？」

「あー、まー、いるっちゃいるけど……さっきも言ったけどあの世界は魔法が全てだから。その魔法使いのほぼすべてが貧乳となれば、価値観も偏るってものよ。でも、ボクらの両親世代は断然巨乳派だったみたい」

色々と歴史があるもんだなあと、知らない世界の俗史に感心した。

でも……。

「間違っているね。すごく間違ってる。どう考えても今が正しい。何だ、正常に戻っただけじゃん」

彼女の話聞いて僕はそう確信したのだった。

「キミ、巨乳の良さが分からないの？ ロマンは感じないの？」

「胸張って言うことじゃないでしょうに。そんな個人の嗜好にケチをつけるのは良くないよ」

胸を張るせいで、元々大きいのがさらに大きく見える。

うん、目に毒とはこのことだ。

「ところで、何でボクなの？」

「あ、これ？ 昔は、ボクも私って言ったんだよね。でも、ちち、あ、別に乳じゃなくて父親の方・・・」「そんなの聞いてません」

だから聞いてもいないことはいらぬと言っのに。

僕が多少語気を荒めて言ったためか、初めて彼女の顔に今まで見られなかった表情が現われたのだ。

それは、郷愁とでも言うのだろうか。どこか憂いを帯びて、何かを懐かしむようなものだった。

「・・・初等科6年の時に父親が言ったのよ。『お前は成長が早い。それはよくないことだ。だから、貧乳が多いボクっ娘になれ』って」「ねえよ。あり得ない。その親、バカなの？ 娘の胸毎日観察してるの？」

やばい。

巨乳とか貧乳とかそういう問題以前に、彼女は身近に危ないヘンタイを抱えているようだ。

本人は気づいていないようなので、とても幸せなことと思うけど。

「まあ、ボクが子供の頃から貧乳派が台頭していたからね。父は古い感性の持ち主で女性は結婚するものだって思ってた、巨乳じゃ無理だと思ったんだろうね」

「でも、まだあなたは若いし、大丈夫だと思うよ。僕の言葉なんて慰めにもならないだろうけど」

あと、人生を懐かしむようになったら、もう後は落ちるだけなんだよね。

それは余計だろうから言わないけれど。

僕は、言わなかった。

そう、僕は。

でも、彼女は違った。彼女は思ったことをはっきりと述べるタイプだった。

「だね」

「はっきり言いますか!？」

配慮は無用とばかりに、彼女ははっきりと僕の言った事を否定した。

「だって、ボクもう25だもん。ここはどうかは知らないけど、20前に結婚するのが当たり前前であっちでは、完全に売れ残りだね」  
「っ!？」

ええーっ!？」

内心で僕は思いきり叫んだ。

どう見ても、20代には見えない顔なのに……。

それよりも何よりも僕には許せないことがあった。

「こんなのより年下なのか……」

「こんなのとは失礼な。ま、いいか。いやさ、大人のお姉さんで巨乳なのは、ある程度のメリットがあるんだけどさ。ボク、見た目は子供なのに妙に胸だけあるでしょ？ あの世界は、俗にいうロリ巨乳の居場所がなくてね。『ロリなのに、おっぱいがあるなんて！お前はそれでも女か！』つて。男ってバカだよな」

「いやいや、女でしょ。あ、でも・・・」

余計な事を言いかけて、僕は慌ててその言葉を飲み込んだ。

言えない、言えやしないよ。

女に見られないなら男になればいいなんてくだらない発想を思い付いたことなんて。

僕がくだらないことを考えているなんて、彼女は知る由もなく笑って話を続ける。

「そこで、ボクと友達の2人が仲間の期待をこの肩に背負って、異世界へ旅立つたってわけ。胸の小さくなる魔法を探しにね」

「つまり、胸以外に重しが増えたってことか。ご愁傷様でした」

ただでさえ重そうだもんなあ。邪魔な物をなくそうということには共感を抱かざるを得ない。

でも、そんなことで異世界にまでやって来るなんてすごく可哀想です。

「うーん、拝まれるなんて感動だな。初めての経験だよ」

「いいえ、拝んでません。合掌しただけです。ふごっ!?! ごほつ、げほつ……」

いきなり彼女は、僕の腹に思いきり蹴りを入れてきた。馬鹿にし過ぎたせいでキレてしまったようだ。

「憐れむならいらないよ、バカっ！」

「っぎゃ!?!」

この魔法使い。

魔法よりも肉弾戦の方が向いているらしい。

首を絞められ薄れゆく意識の中でそう思った。

……やっぱり巨乳は死んでしまえ。

翌朝。

「ねえ、起きて」

知らない女の人の声で目覚めると、そこには昨日の格好のままの彼女は仰向けに寝ている僕を見下ろしていた。

色々と言いたいことはあったけど、まずはこれを聞かないと始まら

ない。

「何で、あなたがここにいるわけ？」

「えー、だってボクの目的を叶えてくれそうな人があっさり見つかったのに取り逃がすなんてもつたないじゃない？」

「・・・」

彼女の返答に僕は絶句した。

これでは、彼女はしばらく僕の周りをうろろろすることになる。

「これほど、ボクのために魔法を教えてくれる人なんて他にいないし。それに、2、3度魔法を受けて、ボクとあっても全く動じてないし。これは、運命だね」

「運命だとしたら、それは最悪だと思います」

2度寝したら、夢だったということはないだろうか。

「ボクは、エレナ・シャルロット。改めてよろし・・・名前なんだから？」

「名乗るほどのものじゃ・・・いでっ」

すると、彼女は僕をでこピンしてけらけら笑った。

そして、一通り笑い終わるとふつと真顔に戻って僕に向かって右手を差し出した。

「よろしく、名無しの権兵衛さん」

「・・・はいはい、それで結構です」

とりあえず、僕も蒲団から右手を出して、彼女の手を握った。



寝起きで、知らない人と握手する日が来るとは思わなかった。

・・・で、これ、何でドツキリ？

「・・・なんか反応が薄いなあ。もしかして、魔法使いが怖い？」

世の中の怖いものには地震、雷、火事、親父というものがある。

けれども、最も怖いのは異世界からの訪問者なんじゃないか。

・・・地震、雷、火事、親父。この言葉も教えない方がいいだろう。何か恐ろしい物が出てきそうだ。

僕は、そう思った。

「はあ・・・じゃあ、協力する条件が1つあります」

「はいはい、どうぞ」

物凄く軽い返事の彼女の事が多少気にかかったけど、気にしないことにした。

「あなたの世界に僕を連れて行ってほしい」

「んあ？・・・まあ、いいけど魔法が使えないと奴隷扱いだよ？」

「貧乳少女のためならできる！」

そういった少女にこき使われるなら奴隷でも構わない。  
僕は、迷いなどなかった。

「うあ………魔法使って男もいるんだけなあ」

彼女が、ぼそつと何か言ったけど、僕は浮かれていて全く聞いてなかった。

こうして、僕は彼女に本当の意味で協力することを決意した。

ユートピアは、すぐそこにあると知ったから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6170f/>

---

伝道魔法少女は今宵も踊る

2011年1月8日23時14分発行